

2025年2月3日（月）日本神学研究センター主催研究会

主題「キリスト教教理の一致と多様性——キリスト論と救済論をめぐって」

主題講演 | レジュメ¹

「違いがありつつ、ひとつ

——聖餐におけるキリスト像の相違と相互補完性」

鈴木道也（花巻教会）

1. 聖餐とは何か

聖餐：キリスト教の礼拝の中心に位置付けられてきた共同の食事のこと。プロテスタント教会は洗礼とこの聖餐の二つを聖礼典（サクラメント）と呼び、伝統的に、神によって定められた「恵みの手段」と受け止めてきた。

聖礼典は目に見える物質を用いるのが特徴。だからこそ、それを「論じる」ことの難しさもある。いざ論じるとなると、目に見える物質と目には見えない神の恩寵がどういう関係にあるのかを「具体的に」説明することが求められるからである。

聖餐式では、パンとぶどう酒を通して、イエス・キリストの肉と血——すなわち、イエス・キリストの人格と身体が可視化される。「イエス・キリスト自身を可視化しようとする」ものが聖餐式である。言い方を換えると、聖餐式とは、会衆一人ひとりが五感を総動員して——目で見、耳で聴き、手で触れ、香りを嗅ぎ、口で味わい——「キリストの現存（現臨）のリアリティを体験的に知覚しようとする儀式」である。



聖餐

……パンとぶどう酒を通して「キリストの現存（現臨）のリアリティを体験的に知覚しようとする」もの

……パンとぶどう酒を通して「イエス・キリスト自身を可視化しようとする」もの

これらの儀式をいざ論理的に体系付けようとする、とたんに困難が伴う。とりわけ聖餐は論理的に叙述するのが難しい対象である。前述したように、聖餐とは「イエス・キリスト自身を可視化しようとする」ものであるから。聖餐とは何かを考えるにあたって、まずはこの点を、最も重要な特質として指摘しておきたい。

2. 聖餐論——キリスト論を土台としているもの

「イエス・キリストはどのような存在であるか」を論じる神学の一分野として、キリスト論が

¹ このレジュメは、筆者が昨年11月に出版した『違いがありつつ、ひとつ——試論「十全のイエス・キリスト」へ』（ヨベル、2024年）の第二部「十全のイエス・キリスト」へ——伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の相違と相互補完性」の内容の一部を要約したものです。レジュメに収めきれなかった議論の詳細については、ぜひ同書を参照していただければ幸いです。

ある。「イエス・キリストとは誰であるのか（私たちにとってどういう存在であるのか）」を取り扱う分野である。赤木善光氏は《すべての聖餐論はキリスト論を前提としている》と指摘する²。

聖餐論においては、パンとぶどう酒との関わりを通して、具体的にキリスト論（特に、イエス・キリストの人格）を論じなければならない。抽象的なままで語ることはできず、だからこそ聖餐論は難しいと赤木氏は述べる³。

聖餐論はキリスト論を土台としているものであるということも、ここで強調しておきたい。

3, 聖餐は一致をもたらすもの……? —教会の分離の要因となってきた聖餐論

聖餐は元来、教会に一致をもたらすものである。《この恵みのしるしは、わたしたちすべてを主において一つにします》（日本基督教団 口語式文『聖餐式』改訂版）⁴。しかしこれまでのキリスト教の歴史において、聖餐は一致をもたらすのではなく、むしろ分離を引き起こす要因となってきた。パンとぶどう酒との関わりの中で言語化される聖餐論の内実に、かなりの相違が生じてしまったからである。

赤木氏は、聖餐論は《神学のリトマス試験紙》だと述べる。神学上の相違が聖餐論において《歴然として顕在化するから》⁵である。よく知られている通り、宗教改革の時代には、聖餐の理解を巡って激しい論争が繰り広げられた。

聖餐論がそれほどの緊張と対立を引き起こしたのは、先に述べたように、パンとぶどう酒との関わりの中で、「具体的に」キリスト論を言語化しなけりなかつたことが要因のひとつとして挙げられる。その言語化の過程においてあいまいなものは捨象され、各人が己の実存を懸けて信じているキリストの現存のリアリティがはっきりと浮き彫りにされることとなった。そしてその分、互いの間にある相違もまた明確に示されることになった。

赤木善光氏は《キリスト論は聖餐論争において中心的とも言えるほど重要な争点となった》⁶ことを指摘している。聖餐論争を通して、ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら宗教改革者たちがそれぞれ相違したキリスト論をもっていることが明らかになった。そして、明らかになった相違を、互いに受け入れることができず、宗教改革者同士が対立し合う事態が生じていった。自身の信仰の根幹に関わる事柄であるからこそ、互いに譲ることができなかつた。

² 赤木善光『宗教改革者の聖餐論』（教文館、2005年）、120頁。

³ 《ビツァーは、「キリスト論の問題は聖餐論において鋭角化する」と言った。この事は単にキリスト論のみでなく、他の問題についてもある程度言うことができるが、特にキリスト論において顕著である。それは聖餐論がパンとぶどう酒という物質とのかかわりにおいてキリストを論じなければならないからである。キリスト論もそれなりに難しい。しかし聖餐論においては、それをパンとぶどう酒という具体的な物質とのかかわりで論じなければならない。抽象的な議論だけでは済まないのである。目の前に存在しているパンとぶどう酒とのかかわりにおいて、キリストが現在どのような存在しているか、が問われるのである》（赤木善光、同、621頁）。

⁴ 日本基督教団信仰職制委員会編『日本基督教団式文（試用版）主日礼拝式・結婚式・葬儀諸式』（日本キリスト教団出版局、2006年）、82頁。

⁵ 赤木善光『なぜ未受洗者の陪餐は許されないのか——神の恵みの手段としての洗礼と聖餐』（教文館、2008年）、71頁。51頁も参照。

⁶ 赤木善光『宗教改革者の聖餐論』、120頁。

たのだとも言える。当時、聖餐論を巡る相違は、「決して容認することのできない相違」として彼らの目に映っていた。



マルティン・ルター



フルドリッヒ・ツヴィングリ



ジャン・カルヴァン

4、神学的な「思考のパラダイム」の相違

宗教改革時の聖餐論争における問題点のひとつ：「互いが前提とするものがすれ違ったまま議論がなされていた点」。

宗教改革者たちは互いが前提としているものがすれ違っていることに気付かぬまま、論争を続けていった。宗教改革者たちは互いに異なった神学的な「思考のパラダイム」をもっていた。しかしその相違に互いに気が付かぬまま、聖餐論争に入っていた。

思考のパラダイム：その人の持つ世界観や人生観、基本的な思考の枠組みのこと。普段どのような思考パターンで物事を考えているのか、どのような事柄に重点を置いているのか、その基本的な枠組み。思考のパラダイムはその人の資質やそれまでの経験とも密接に関わっている。

《物事を考えるにあたって、基本的にどのような仕組みで考えるかは非常に重要なことであるが、それが異なる場合、理解は困難となり、話し合いは食い違ってくる。そしてその相違が意識されないことさえしばしばである。ルター派と改革派との聖餐論争においては、個々の概念や言葉と共に、否、それ以上に、考え方の基本的構造、思考のパラダイム、信仰と神学との根本的設問が異なるのであるが、その当時は、それを乗り越えることはおろか、その存在すらも明確に自覚されなかったのである》(赤木善光氏)⁷。

赤木善光氏は宗教改革者の聖餐論を論ずるにあたって、まずそれぞれの神学の基礎構造を正確に理解することが重要であることを指摘⁸する。

⁷ 赤木善光、同、400頁。カルヴァンの聖餐論を論じる中での一文。

⁸ 《聖餐論における相違を克服するとなると、問題は聖餐論だけではなく、信仰の基本的なあり方から、考え直さなければなりません。他の教会の場合も同様です。聖餐論の一致をカトリックや正教会を含めて考えるとなると、前途遼遠という気がします。しかしそうだとすると、相互理解の歩みを少しずつ続けるほかないのです。そのためには、異なる教派の信仰を、その基礎構造から正しく認識することから始めねばなりません》(赤木善光『なぜ未受洗者の陪餐は許されないのか——神の恵みの手段としての洗礼と聖餐』、71頁)。

宗教改革時の聖餐論争において互いに歩み寄ることができなかったことの要因のひとつとして、この点への認識が抜け落ちていたことが挙げられるであろう。500年前の当時は、そこに思い至る

5, 相違の根本の要因としての「キリスト像」の相違

神学的な思考のパラダイムの相違を受け止めることの必要性について述べた。では、そもそも、この思考のパラダイムの相違はどこから生じているのであろうか。筆者は、その相違は「キリスト像」の相違から生じていると考えている。

キリスト像とは、ここでは、「論」である以前のもの、感覚的・経験的なキリスト像の意味で用いている。各人が感覚的・経験的に現存（現臨）のリアリティ・救いのリアリティを感じているキリストの一側面（像）である。

先ほど、聖餐とは「イエス・キリスト自身を可視化しようとするもの」であり、聖餐論はキリスト論を土台としていることを述べた。より厳密に言うと、聖餐論において根本にあるものは、キリスト論ではなく、キリスト像だと言うことができる。

たとえば、宗教改革の時代、聖餐論争を通して宗教改革者たちは自身のキリスト論を確立していった。ただし元々内に持っていたのは、「論」以前のもの、現存のリアリティを伴うキリスト「像」であった⁹のではないか。

6, 現代の聖餐論議——伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論

先ほど、聖餐は元来一致をもたらすものとされていたにも関わらず、分裂をもたらす要因となってきたことを述べた。現代においても、やはり聖餐論は教会の分裂の要因のひとつとなっている。

現代における聖餐論議の主たるもののひとつは、「伝統的な聖餐論」と「開かれた聖餐論」の対立である。筆者が属するプロテスタント合同教会である日本基督教団においても、聖餐理解の相違によって教団内に対立と分断が生じている現状がある。

(1) 伝統的な聖餐論

まずは伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論という語について確認をしておきたい。

ここでの伝統的な聖餐論とは、古代教会以来の伝統的な枠組みに依拠する聖餐理解のことを言っている。この伝統的な聖餐理解の特質は、「イエス・キリストへの信仰を前提としている」点¹⁰。「洗礼を受けた者のみが聖餐に与ることができる」（未受洗者には聖餐は『閉ざされている』）という点はその共通の理解となっている。

のは難しいことであったのかもしれない。しかし後世の私たちは、赤木氏が指摘する通りに、まずそれぞれの聖餐論が前提としている神学の基礎構造、思考のパラダイムを出来る限り正確に知ろうとする必要がある。互いの相違を明確にした上で、議論に臨む必要がある。

⁹ キリスト像には、その人が「キリストの救い・現存のリアリティをどの側面に感じているか」が深く関わっている。ルターにはルターのキリスト像があり、ツヴィングリにはツヴィングリのキリスト像があり、カルヴァンにはカルヴァンのキリスト像があった。宗教改革者たちにおいては、そもそも、このキリスト像が相違していた。そしてその相違が、聖餐論争を通して露わになっていったというのが筆者の受け止めである。聖餐のパンとぶどう酒との関わりを通して、自身のキリスト像を具体的に言語化・解釈し、そして「論」として展開することを求められていった。

¹⁰ 宗教改革時代の聖餐論に教派によりかなりの相違があることはすでに述べた通りであるが、そのように相違はありつつ、「聖餐の受領において求められるのは信仰である」との理解においてははっきりと一致していた。

◎伝統的な聖餐論

古代教会以来の伝統的な枠組みに依拠する聖餐理解。イエス・キリストへの信仰を前提としている点で一致。「洗礼を受けた者のみが聖餐に与ることができる」(未受洗者には聖餐は『閉ざされている』)という共通の理解をもつ。

(2) 開かれた聖餐論

対して、20世紀の後半から言語化され始めた比較的新しい聖餐論が「開かれた聖餐論」である。開かれた聖餐論は、狭義においては「未受洗者にも聖餐は『開かれている』」と考える立場のことを言う。より広義においては、聖餐はすべての人に——とりわけこの世で最も小さくされた者(最も弱い立場に置かれた隣人)に対して「開かれている」とする理解のことを指している。この新しい聖餐理解では「イエス・キリストへの信仰は必ずしも前提とされない」ことが特質。

開かれた聖餐論においては、すでに述べた通り、イエス・キリストへの信仰は必ずしも前提とはされない。よって聖餐に与るに際しても、洗礼の有無は問題とはならない(洗礼を受けていない人が洗礼に与ることを『未受洗者陪餐』と言う)。

土台としている枠組み自体が異なるものであったので、当然、伝統的な聖餐理解と新しい聖餐理解との間には緊張と対立が生じることになった。

◎開かれた聖餐論

20世紀になってから言語化されるようになった比較的新しい聖餐理解。イエス・キリストへの信仰は必ずしも前提とされない。「未受洗者にも聖餐は『開かれている』」(洗礼は陪餐の条件とはならない)という新しい理解をもつ。

(3) 根拠とする聖書箇所の変遷

(a) 主の晩餐

伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の変遷は、根拠とする聖書箇所¹¹にも表れている。

伝統的な聖餐論が根拠としている聖書箇所は「主の晩餐(最後の晩餐)」(マルコによる福音書14章22-26節、マタイによる福音書26章26-30節¹²、ルカによる福音書22章15-20節、コリント

¹¹ 主の晩餐とイエスの食卓の他に、聖餐のルーツとされる聖書箇所として、「五(四)千人の供食」(マルコによる福音書6章30-43節、8章1-10節)と「復活のキリストとの食事」(ルカによる福音書24章28-43節)の記事がある。

～聖餐のルーツとされる4つの聖書箇所～

① イエスの食卓 ②五(四)千人の供食 ③主の晩餐 ④復活のキリストとの食事

¹² 《一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」／また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。／これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。…」》(マタイによる福音書26章26-28節、新共同訳)。この文言はイエス・キリスト自身の制定の言葉として、聖餐式の式文において伝統的に取り入れられてきたものである。

の信徒への手紙一 11 章 17-34 節)。

イエス・キリストは逮捕される直前、弟子たちと最後の食事を共にした。その主の晩餐におけるキリストの言葉と振る舞いが伝統的な聖餐論の根拠となってきた。

(b) イエスの食卓

開かれた聖餐論ももちろん主の晩餐の記事を聖餐式の根拠のひとつとしているが、それ以上に重視するのが、イエスが日常的に行っていた会食（愛餐）の記事¹³である。

福音書は、イエスが当時の社会において「罪人」とされ差別されていた人々と食卓を共にしていたことを記している。開かれた聖餐論に立つ人々が第一の根拠としているのが、この会食の記事である（これらの会食の記事を以後、「イエスの食卓」と総称したい）。

開かれた聖餐論の立場である高柳富夫氏は次のように述べている。《つまり、聖餐式の根拠は最後の晩餐のみに求めるわけにはいかないということです。イエスの生においてイエスが実践したイエスの食卓を想起することが、聖餐式の意義を考える重要な根拠になるということです。／イエスが実践した「イエスの食卓」は、端的に包含的で開放的な食卓でした。そこには、ユダヤ教正統派の清浄規定を厳格に守る食卓から分離され排除されていた人々が、積極的に招かれていたのです》¹⁴。

引用文にあるように、高柳氏はイエスの食卓を想起することこそが、聖餐式の意義を考える重要な根拠になると述べている。

以上のように、同じ食卓でも、主の晩餐とイエスの食卓とでは、ずいぶんとその内実に相違があることが分かる。主の晩餐の強調点は、間近に迫る十字架とその死を指し示すことにある。対してイエスの食卓は、分け隔てなく——無条件に——人々を食卓へと招いたイエスの姿を指し示すことに強調点を置いている。前者は宗教的な儀式的要素が強く、後者は日常的な愛餐の要素が強い¹⁵と言える。

¹³ 《イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。／ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。／イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」》(マルコによる福音書 2 章 15-17 節、新共同訳)。

¹⁴ 高柳富夫『包含的・開放的イエスの食卓の想起として』(『聖餐の豊かさを求めて』所収、新教出版社、2008 年)、31 頁。

¹⁵ 最初期の教会の聖餐式においては、聖餐と愛餐は必ずしも二者択一的なものではなかったようである。最初期の教会においては、聖餐と並んで愛餐が行われていた。当時はいまだ聖餐と愛餐の厳密な区別はなされていなかったと言える(たとえば、コリントの信徒への手紙一 11 章 17-34 節を参照)。しかし次第に両者は切り離されるようになり、聖礼典(sacrament)としての聖餐の側面が強調されるようになっていった。開かれた聖餐論の立場である高柳富夫氏は、聖餐と愛餐の結びつきを再び取り戻し《聖餐の愛餐的性格を回復する》べきことを訴えている。《聖餐は、最初期キリスト教共同体において、愛餐の枠組みの中で行われていたことに十分に注目する必要があります。聖餐は愛餐的性格を伴っていたということです。クローズド論者が言う、愛餐は受洗、非受洗に関わらずすべての者に開かれているが、聖餐は受洗者にのみ限定されているという主張は、最初期キリスト教の愛餐的性格を伴う聖餐には妥当しません。このような最初期に行われていた聖餐の

7、伝統的な聖餐論が指し示すキリスト像——信仰告白のキリスト、
開かれた聖餐論が指し示すキリスト像——生前のイエス

以上のように、伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論との間には、神学的な「思考のパラダイム」の大きな相違が見られる。では、この相違がどこから生じているのであろうか。それは他ならぬ、「キリスト」像の相違である。伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の双方の根本に、固有のキリスト像が存在している。そのキリスト像の相違が、神学的な思考のパラダイムの相違を生じさせている。

では、それぞれの聖餐論が指し示すキリスト像はどのようなものであろうか。伝統的な聖餐論が指し示す固有のキリスト像は「信仰告白のキリスト像（十字架－復活－昇天－再臨のキリスト像）」であり、開かれた聖餐論が指し示す固有のキリスト像は「生前のイエス像」だというのが筆者の考え（仮説）である。

伝統的な聖餐論が指し示すキリスト像：「信仰告白のキリスト像」（十字架－復活－昇天－再臨のキリスト像）

開かれた聖餐論が指し示すキリスト像：「生前のイエス像」

特に、後者の聖餐論を通して、四福音書に内在する「生前のイエス像」の内実がはっきりと言語化され、可視化されることが起こったことに、重要な意義がある。ここに、今日の日本基督教団の聖餐論議¹⁶がキリスト教会にもたらした重要な寄与があると考ええる。

愛餐的性格を回復することが、聖餐の本質に関わる事柄としてこの上もなく重要であると考えます。

そして、聖餐の愛餐的性格を回復するとは、すなわち「イエスの食卓」の開放性と包含性を回復するということです》（高柳富夫『開放的・包含的聖餐論』、北村慈郎牧師の処分撤回を求め、ひらかれた合同教会をつくる会編『新教コイノーニア 31 戒規か対話か 聖餐をめぐる日本基督教団への問いかけ』所収、59、60頁）

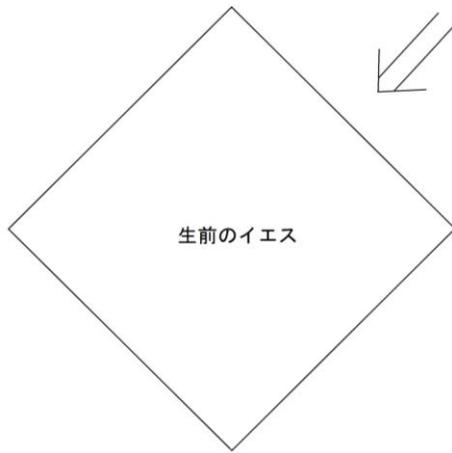
一方で、伝統的な聖餐論に立つ人々は、そのような理解を認めない。伝統的な聖餐論の立場である組織神学者の芳賀力氏は、高柳富夫氏の前掲（『聖餐の豊かさを求めて』、31頁）の文章を受けて、自分たちも聖餐式の根拠を最後の晩餐（主の晩餐）のみに求めてはいないと述べつつも、聖餐においては《最後の晩餐と復活者と共なる喜びの食卓が決定的な意味を持っている》ことを強調している（芳賀力『それが「聖餐の豊かさ」なのだろうか』、『まことの聖餐を求めて』所収、教文館、2008年）、376頁）。

すなわち、伝統的な聖餐論においては、主の晩餐（と『復活のキリストとの食事』）が決定的な意味を持っているのであり、主の晩餐がイエスの食卓を規定しているのだということができる。対して、開かれた聖餐論においては、イエスの食卓が主の晩餐を規定している。

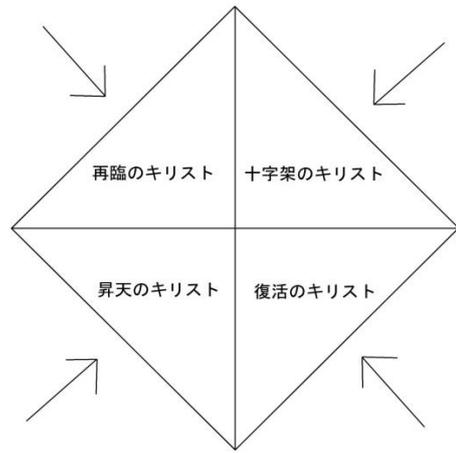
¹⁶ 2008年、日本基督教団の聖餐論議を象徴する二つの書が出版された。山口雅弘編著の『聖餐の豊かさを求めて』（新教出版社）と芳賀力編著の『まことの聖餐を求めて』（教文館）である。前者は開かれた聖餐論の立場である人々によって書かれ、後者は伝統的な聖餐論の立場の人々によって書かれている。《どちらも共著で、聖餐を「開く」か「閉じる」かで、立場は真っ向から対立することとなる》（小海基『日本における聖餐論義の現状』、北村慈郎牧師の処分撤回を求め、ひらかれた合同教会をつくる会編『新教コイノーニア 31 戒規か対話か 聖餐をめぐる日本基督教団への問いかけ』所収、81頁）。

～今日の聖餐論議の重要な寄与～

四福音書に内在する「生前のイエス像」の可視



「開かれた聖餐」の聖餐論が指し示すキリスト像 ～生前のイエス



伝統的な聖餐論が指し示すキリスト像 ～信仰告白のキリスト

図の矢印の部分は、それぞれの聖餐論がイエス・キリストのどの側面に強調点を置いているかを表している。伝統的な聖餐論（右の図）は信仰告白のキリスト像の四側面——十字架のキリスト—復活のキリスト—昇天のキリスト—再臨のキリスト——を指し示している¹⁷。

対して、開かれた聖餐論（左の図）は生前のイエス像を特化して指し示している。ここでの生前のイエスとは、歴史上の人物であるナザレのイエスのことを指している。

古代教会において議論となったのは、生前のイエスの「内実」ではなく、キリストの人性および受肉論であった。生前のイエスの内実が問題とされるようになったのは、聖書学が発達した近現代以降のことである。生前のイエスの側面はキリスト教がキリスト教である上で決定的に重要なものであると同時に、その内実については、はっきりと言語化されない時代が長く続いた。開かれた聖餐論が指し示しているのは、この生前のイエスとその内実だというのが筆者の考えである。

このように、伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論においては、指し示しているキリスト像が異なっている。そしてこの異なる二つのキリスト像が、それぞれの神学的な思考のパラダイムを創り出している。今日の聖餐論議の根本には、この信仰告白のキリスト像と生前のイエス像の相違の問題¹⁸があるのだと言える。

¹⁷ 宗教改革者たちの間でも、十字架—復活—昇天—再臨のキリスト像の四側面のどこに強調点を置くのかについて相違があったが、信仰告白のキリスト像を土台としそれを神学全体の枠組みとしている点においては一致していた。

¹⁸ この問題は、「ケリュグマのキリスト」と「史的イエス」の問題と密接に関連している。「ケリュグマのキリスト」と「史的イエス」の問題については、拙著『違いがありつつ、ひとつ——試論「十全のイエス・キリスト」へ』293-298ページを参照。

(1) 信仰告白のキリスト像の特質——信仰によって可視化

信仰告白のキリスト像の特質のひとつは、信仰がないと可視化できないものだということである。十字架－復活－昇天－再臨のキリスト像は、信仰によって可視化される。いわば、信仰という眼鏡をかけないと見るができないイエス・キリストの四側面である。その意味で、特殊主義的であり、限定的である。伝統的な聖餐論はこのキリスト像を土台としているので、「キリストへの信仰が前提とされる」ことになる。この立場においては、キリストへの信仰は洗礼によって実存を新しくされて与えられるものである。よって、聖餐に与るためには洗礼の有無を問う必要があり、「洗礼から聖餐へ」という道筋が不可欠・不可逆なもの¹⁹とされる。

(2) 生前のイエス像の特質——信仰がなくても可視化

対して、開かれた聖餐論が土台としている生前のイエス像とその内実は、「信仰がなくても可視化できる」ものである。人間イエスがどのような言葉を発し、どのように振る舞ったかは、信仰がなくても可視化できるものだからである。その意味で、普遍主義的であり、開放的な特徴をもっている。よって、開かれた聖餐においては「キリストへの信仰が必ずしも前提とされない」ことになる。陪餐に際して洗礼が必ずしも条件とはされないし、「聖餐から洗礼へ」という道筋も可能なもの²⁰とされる。

開かれた聖餐論において、聖餐における無条件の招きは欠かすことの出来ない、必須の事柄である。ここに洗礼という条件を附加してしまうと、無条件の招きの恵みが失われてしまうこととなる。伝統的な聖餐論の立場である人々にとって「洗礼を受けた者が聖餐に与ることができる」のが譲ることができない一致点であるように、開かれた聖餐論の立場である人々にとっては、「洗礼の有無に関わらず＝無条件で聖餐に与ることができる」ことが譲ることができない一致点なのである。よって、この聖餐理解においては、「イエスの食卓」が

¹⁹ 芳賀力氏が次のように述べる通りである。《洗礼から入らなければ聖餐は聖餐にはなりません。そして愛餐をいくら繰り返しても、洗礼を受けた人間になることはできません。まず洗礼的実存に変えられて、そこに聖餐の敬虔を盛り、世へと遣わされていく者でありたいと思います》(芳賀力『それが「聖餐の豊かさ」なのだろうか』、『まことの聖餐を求めて』所収、387頁)。《聖餐を愛餐に変えてしまった時、教会は一番大事なものを失います。そして、聖餐を愛餐にしない唯一の歯止めは、聖餐を洗礼者の陪餐として守り、洗礼から聖餐への順路を正しく守ることなのです。洗礼と聖餐は、逆転し得ない、順序のあるひとつながりの sacrament です》(芳賀力『荒れ野に備えられた主の食卓』、『まことの聖餐を求めて』所収、227頁)。

伝統的な聖餐論とは、「応答」としての(能動的な)聖餐であるとも言える。

²⁰ 高柳富夫氏は「洗礼から聖餐へ」という一方向のみを「正しい」とする考え方に疑問を呈す。

《聖餐は全ての人に開かれている恵みだと言いながら、聖餐の sacrament 性を超越的な秘義性や奥義性としてあまりにも強調しすぎることは、聖餐式の聖性を重んじるあまり、結局は洗礼という狭い門を通らなければそこにまで至ることができない奥義なのだという仕方で、聖餐式を閉ざされたものにしてしまいます。その結果、洗礼から聖餐へという一方向のみを「正しい」とすることになり、その「正しい」聖礼典に与った者だけが「正しい」のだとして、聖餐から洗礼への道を閉ざして、オープンを排除することになります》(高柳富夫『包含的・開放的イエスの食卓の想起として』、『聖餐の豊かさを求めて』所収、25頁)。

開かれた聖餐論とは、無条件の「招き」としての(受動的な)聖餐であるとも言える。

特に重要なものとなる。開かれた聖餐論は、「罪人」として差別されていた人をはじめ、人々を無条件に自身のもとに招いた生前のイエスの姿を指し示し、可視化するものに他ならないからである。

(3) 聖餐とはパンとぶどう酒を通して「イエス・キリスト自身を可視化しようとする」もの
伝統的な聖餐論に立つ芳賀力氏は、洗礼がすべての人に開かれており、《無資格、無条件》²¹であることを強調している。洗礼はすべての人に開かれているのだから、洗礼を聖餐参与の条件にする自分たちの立場を「差別的」とすることは《お門違いの批判》²²であると述べている。また、「開かれた」ということを強調したいのであれば、開かれた聖餐論の立場である人々は、なぜもっと《洗礼の開放性》²³を語らないのかと疑問を投げかけている。《洗礼を受けるに当たって求められるのは、品行方正な人格でも立派な行いでもなく、ただ十字架につけられ甦られた方を救い主と信じ、神にすべてを委ねる信仰だけです。そこには人種や性別、学歴や職種、知力も体力も一切問われません。洗礼はそれほどに普遍的で、包括的なものとして、すべての人に開かれたものなのです。

私たちはまず何よりもこの洗礼の普遍的包括性の恵みをしっかりと心に刻むべきでしょう》²⁴。

確かに、洗礼はすべての人に開かれているもので、そこには無条件の招きがあると言える。「洗礼から聖餐へ」という道筋が「差別的」「律法主義的」であるという批判に、伝統的な聖餐論の立場の人々が反発するのも理解できることである。芳賀力氏は『聖餐の豊かさを求めて』の筆者たちの言説に対して、アイロニカルに次のように反論する。《よく考えてください。洗礼はむしろ強者のためではなく弱者のためにこそ備えられているものです。強者は自分に悔い改めの洗礼など必要ないと思っているからです。開かれた〈洗礼から聖餐へ〉という教会の実践を、いきなり差別論と結びつけるこの種の発想からはそろそろ卒業してほしいと思います》²⁵。

けれども、聖餐とはパンとぶどう酒を通して「イエス・キリスト自身を可視化しようとする」ものであるとの定義を踏まえると、どうであろうか。たとえ洗礼がすべての人に開かれているのだとしても、聖餐が自身が拠って立つキリスト像を指し示すものである限り、生前のイエス像に自身の信仰の土台を据える人々にとっては、それが「開かれた聖餐」であることが必須の事柄となるであろう。生前のイエス像を可視化しようとするものが、開かれた聖餐だからである。よって、開かれた聖餐論の神学的な思考の枠組みにおいては、洗礼がすべての人に開かれているからといって、聖餐はクローズでよいことにはならない²⁶のである。

²¹ 芳賀力『それが「聖餐の豊かさ」なのだろうか』(『まことの聖餐を求めて』所収)、377頁。

²² 同、375頁。

²³ 同、374頁。

²⁴ 同、387頁。

²⁵ 同、375頁。

²⁶ また、前掲の文章において、芳賀氏は《いきなり差別論と結びつけるこの種の発想からはそろそろ卒業してほしい》と述べているが、『聖餐の豊かさを求めて』に寄稿された文章もまた、各人の実存を懸けた信仰告白の言葉であることを伝統的な聖餐論に立つ方々は受け止める必要があるのではないか。開かれた聖餐論が強調する無条件の招きというのは、何か教会政治的なイデオロギーに

【参考】伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の神学的な「思考のパラダイム」の相違

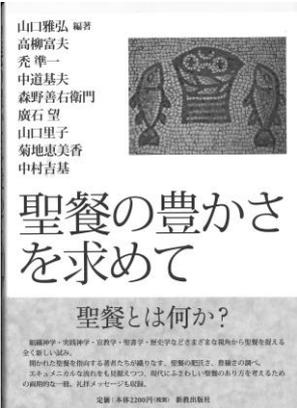
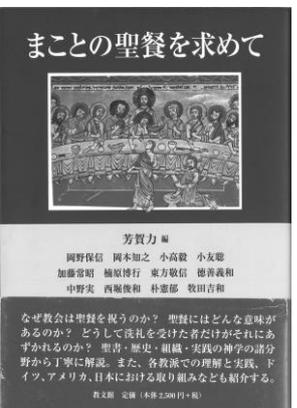
伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の根本に、固有のキリスト像があることを述べた。そしてその固有のキリスト像が、それぞれの神学的な「思考のパラダイム」を造り出している。

「罪」「十字架」「復活」「福音」などの重要な用語を巡っても、両者においては定義や理解が異なっている。パラダイムに大きな相違があるにも拘わらず、現在の日本基督教団の聖餐論義においてはそれらの相違に配慮した議論がなされていない傾向がある。すなわち、「互いが前提とするものがすれ違ったまま議論がなされている」という宗教改革時から引き継ぐ課題がここにも見られる。

伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論の神学的な思考のパラダイムを整理しておくことにも意味があると思うので、参考までに、両者の神学的パラダイムの相違を筆者なりに表にしたものを記しておきたい（論拠や詳細については、拙著『違いがありつつ、ひとつ——試論「十全のイエス・キリスト」へ』280-307ページを参照）。

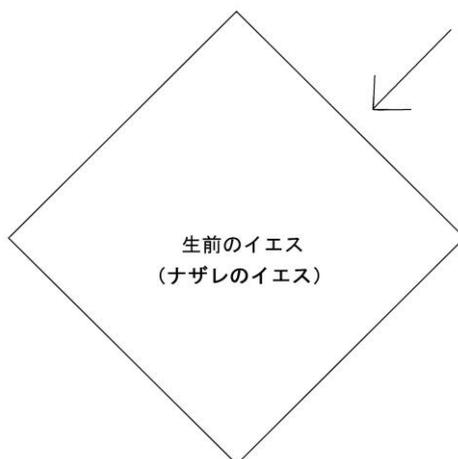
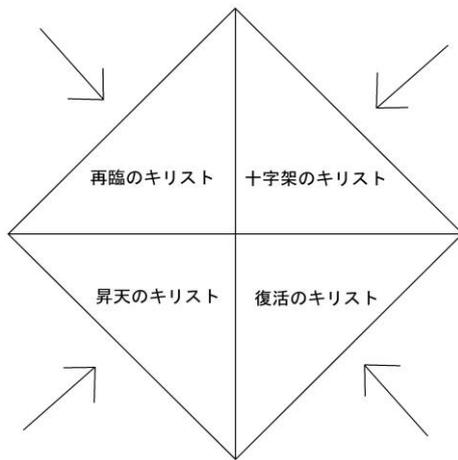
開かれた聖餐論	伝統的な聖餐論
<p>「生前のイエス像」を土台とし、それを指し示す。</p> <div data-bbox="316 907 635 1232" style="text-align: center;"> </div> <p>その内実は、「その『生』全体（言葉と振る舞い）をもって、創造神の『無条件の肯定と招き』を伝える『人の子』（＝一人の人間）なるイエス」。彼は人々を社会的な罪から解放し、より人間らしい生を付与し、人間に尊厳を確保するよう働く。</p>	<p>「信仰告白のキリスト像」を土台とし、それを指し示す。</p> <div data-bbox="1029 918 1353 1243" style="text-align: center;"> </div> <p>その内実は、「十字架－復活－昇天－再臨のキリスト」。</p> <p>彼は人々を十字架により実存的な罪と死の支配から解放し、復活による新しい命を付与し、神に栄光を帰するよう働く。</p>
<p>キリストへの信仰が必ずしも前提とされない。信仰がなくても可視化できるイエス・キリストの側面。</p>	<p>キリストへの信仰が前提とされる。信仰がないと可視化できないイエス・キリストの側面。</p>
<p>洗礼の有無は問われない。普遍主義的・開放的。</p>	<p>洗礼が条件となる。特殊主義的・限定的。</p>
<p>神からの無条件の「招き」としての聖餐。受動的。</p>	<p>神への「応答」としての聖餐。能動的。</p>
<p>日常的な愛餐（イエスの食卓）が聖餐（主の晩餐）を規定する。</p>	<p>宗教的な聖餐（主の晩餐）が愛餐（イエスの食卓）を規定する。</p>

よるものなのではなく、信仰の根本から——現存のリアリティを感じているキリスト像から——生じているものである。それぞれの聖餐論の土台にあるものは信実なるキリスト像であることを、私たちは今一度受け止め直すことが求められている。

開かれた聖餐論	伝統的な聖餐論
<p>隣人への愛を教える。人間に尊厳を確保する方向性。</p> <p>人間の貴さに強調点を置く。</p>	<p>神への愛を教える。神に栄光を帰する方向性。</p> <p>人間の卑小さ・罪深さに強調点を置く。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・このキリスト像は使徒信条などの古代信条においてははまだ言語化されていない。聖書学の発達に伴い、近現代以降に明確に言語化。 ・イエスの「生」（言葉と振る舞い）を重視（私たちはこのイエスと『共に生きる』＝イエスとの連帯）。 このイエスの生の内に福音がある。 ・イエス・キリストの「人性」を重視。 人の子イエスが指し示す「事柄」（神の国）に神学的な啓示を見出す。 ・創造論的。贖罪論には否定的。 ・罪を社会の構造的な悪として理解する傾向。 ・十字架は「イエスを死に追いやった、人間の罪悪の象徴」であり、復活はイエスの「生」全体への神による「然り」である。 ・「史的イエス」と関わる。 ・四福音書や書簡が素材とする「史的イエス証言」に基づく。 ・「社会との関わり（人間的な連帯）・変革」が教会が取り組むべき責任事項。 ・マルコによる福音書を特に重視する傾向。 	<ul style="list-style-type: none"> ・このキリスト像は使徒信条において明確に言語化。初期カトリック教会（古代教会）の時代より伝統的なキリスト論の枠組みを形成。 ・キリストの「十字架－復活－昇天－再臨」（出来事）を重視（私たちはこのキリストを『信じる』＝キリストへの信仰）。 これらの神学的な救いの出来事の中に福音がある。 ・イエス・キリストの「神性」を重視。 神の子キリスト自身に神性を見いだす。 ・救済論的。贖罪論を重視。 ・罪を実存的・内面的に理解する傾向。 ・十字架は「キリストの贖罪による、人間の罪の赦し」。十字架と復活は人間を救済するための「神の計画」。 ・「ケリュグマのキリスト」と関わる。 ・四福音書や書簡が意識的に提示する「キリスト像」に基づく。 ・「礼拝」「伝道」が教会が取り組むべき責任事項。
<p>日本における代表的な著書：山口雅弘編著『聖餐の豊かさを求めて』</p> 	<p>日本における代表的な著書：芳賀力編著『まことの聖餐を求めて』</p> 

9、信仰告白のキリスト像と生前のイエス像の相互補完性

伝統的な聖餐論は「信仰告白のキリスト像」を指し示し、開かれた聖餐論は「生前のイエス像」を指し示している。両者は本来的に対立する関係にあるのではなく²⁷、「相互補完」する関係にあるというのが筆者の考え（仮説）である。



「十字架のキリスト」「復活のキリスト」「昇天のキリスト」「再臨のキリスト」から成り立つ「信仰告白のキリスト像」は、神の子キリストへの信仰がないと可視化できないものである。信仰という眼鏡を通して見ることができるイエス・キリストの四側面である。

この四側面は、特に、神の栄光について私たちに教えるものだと言える。この四側面は神の栄光についての感覚を私たちの内に育む。

対して、生前のイエス像は、キリストへの信仰がなくても可視化できるものである。そこに現存しているのは一人の人間（人の子）なるナザレのイエスだからである。信仰という眼鏡がなくても見ることが出来るイエス・キリストの一側面（土台部分）である。

この底面は、特に、人間の尊厳について私たちに教えるものである。この側面は、人間の尊厳についての感覚を私たちの内に育むものだと言える。

これらのキリスト像に優劣はないが、集中して言語化すべき時はあると言えるのではないか。いまの時代（特に20世紀後半以降）は、特に後

者の生前のイエスの側面を言語化している時期であると受け止めることができる。開かれた聖餐は、この生前のイエス像を具体的に「可視化する」ものである。

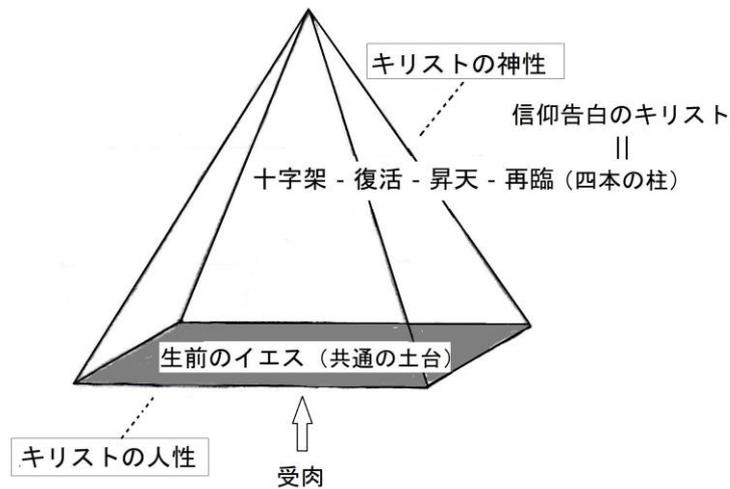
この生前のイエス像を土台に据える——改めて、はっきりと意識して——とき、キリスト教会はこの社会にまことに根を下ろしていくことができるようになるのではないか。

²⁷ 私たちが常に立ち止まって考えねばならないのは、自分が拠って立つ枠組み「のみ」が、唯一「正しい」ものなのだろうかということである。キリスト教信仰に関して言えば、私たちは自らが拠って立つキリスト像だけが「絶対である」と捉えることに、注意深くあらねばならない。そしてそれは今日の聖餐論争においても同様のことが言えるのではないか。あるひとつの聖餐論のみが「正しい」とは言えない。伝統的な聖餐論も開かれた聖餐論も、それぞれが信実なるイエス・キリストの一側面を指し示しているからである。

10、「違いがありつつ、ひとつ」である在り方の提示

今まで述べてきたことは、筆者としては、キリスト教会がこの2000年近く、「まことの神であり、まことの人である」と告白し続けてきたイエス・キリスト²⁸を、新しい視点と新しい言葉で表現し直しているものであると受け止めている。何か新しいキリスト像を創出しているというわけではない。

生前のイエス（キリストの人性）を「（共通の）土台」とし、十字架－復活－昇天－再臨のキリスト（キリストの神性）を「四本の柱」とする正四角錐——それが伝統的なキリスト教信仰の基本構造²⁹である。



～伝統的なキリスト教信仰の基本構造～

「信仰告白のキリスト像（＝キリストの神性）」も「生前のイエス像（＝キリストの人性）」も二者択一的なものではなく、元来、切り離すことのできないもの。両者の枠組みの間には、確かに大きな相違がある。その固有性は「混ざらない」、と同時に、「分離はされない」ものである。

伝統的な聖餐論はこの「信仰告白のキリスト像」を指し示し、開かれた聖餐論はこの「生前のイエス像」を指し示している。

²⁸ たとえばカルケドン公会議（451年）において採択された古代信条のカルケドン信条では、イエス・キリストの両性が《真の神であり、同時に…真の人間である》と定義されている。イエス・キリストにおいて、神性と人性は、「混ざらない」、と同時に、「分離はされない」。神性と人性はそれぞれ固有性が保たれつつ、同時に、ひとつに結び合わされているとしている。

《われわれの主イエズス・キリストは唯一の同じ子である。彼は神性を完全に所有し、同時に人間性を完全に所有する。真の神であり、同時に理性的靈魂と肉体とから成る真の人間である。神性において父と同質であるとともに、人間性においてわれわれと同質である》（デンツィンガー・シェーンメッツァー『カトリック教会 文書資料集 信経および信仰と道徳に関する定義集』、A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1974年、69頁）。

²⁹ 上の図は、筆者が独自に作成したものである。通説として、このような図が存在するわけではない。

以上、伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論のキリスト像の相違と相互補完性について述べてきた。伝統的な聖餐論と開かれた聖餐論が指し示すキリスト像は、それぞれ固有性を保ちつつ、同時に、ひとつに結び合わされているのだと筆者は受け止めている。聖餐において現わされるこの「違いがありつつ、ひとつ」である在り方³⁰を改めて提示していくことは、キリスト教会においてのみならず、私たちが生きる社会においても重要な使信になり得るものではないだろうか。

参考文献：

赤木善光『宗教改革者の聖餐論』（教文館、2005年）

赤木善光『なぜ未受洗者の陪餐は許されないのか——神の恵みの手段としての洗礼と聖餐』（教文館、2008年）

北村慈郎牧師の処分撤回を求め、ひらかれた合同教会をつくる会編『新教コイノーニア 31 戒規か対話か 聖餐をめぐる日本基督教団への問いかけ』（新教出版社、2016年）

日本基督教団信仰職制委員会編『日本基督教団式文（試用版）主日礼拝式・結婚式・葬儀諸式』（日本キリスト教団出版局、2006年）

芳賀力編『まことの聖餐を求めて』（教文館、2008年）

山口雅弘編『聖餐の豊かさを求めて』（新教出版社、2008年）

デンツィンガー・シェーンメッツァー『カトリック教会 文書資料集 信経および信仰と道徳に関する定義集』（A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1974年）

J・ゴンサレス『キリスト教神学基本用語集』（鈴木浩訳、教文館、2010年）

³⁰ 拙著『違いがありつつ、ひとつ——試論「十全のイエス・キリスト」へ』の第一部では、四福音書のキリスト像の相違と相互補完性について論述しています。こちらもご参照いただければ幸いです。